

初めての経常黒字を確保しました。綾部市で初の複合型サービスを開設し、医療と介護の複合型施設としてリニューアルスタートしたあやべ協立診療所は、部門域を超えた職員の連携と協働を大切にしながら事業活動を進めてきました。コミュニティホールの開放、友の会の元氣サロンの開始など地域の財産としての施設活用を進めるとともに、綾部市と連携した認知症カフェを開始するなど、これまでのつながりに加え、新しい連携を広げていきます。

5. 京都市民連中央病院総合移転をめざす 事業活動の到達と経営活動の概況

移転事業の中心となる京都市民連中央病院は、①急性期機能の強化、②連携を広げる、③1万人の共同組織実現、④必要利益(未来コスト)2億円の確保を重点に進めてきました。DPC病棟の拡大(253床から293床)、救急車受入れの強化、全身麻酔手術の増加、脳神経外科手術の開始、外科、整形外科、リハビリ分野で新たな技術の導入など前進面も多くありますが、急性期医療の実力をつけることは引き続きの重点課題です。連携では、右京区の開業医訪問を実施、開業医が講師となる医療懇談会の開催、歯科医師会との連携、逆紹介を広げるとりくみも本腰を入れ始めました。医療の質の向上やチーム医療の前進にもつながる診療報酬上の加算算定の強化や新たな取得、精神科リエゾンチームの稼働、透析患者受入増など収益増のとりくみも積極的に展開し、必要利益確保を目指しました。患者総合サポートセンターを開設しました。

医師の確保と養成(研修含む)では、2015年4月から初期研修医4名、後期研修医5名があらたに研修を開始しました。2016年度から初期研修医定員数が1名減になりましたが、5名がフルマッチし、本年

4月から初期研修医として研修を開始しました。

吉祥院病院は黒字転換が最大の課題でしたが、10数年ぶりに経常黒字となりました。予算には未達でしたが、2351万円の改善です。収益も予算には未達ですが、3000万円以上増加しました。在宅・病棟・外来とも、医療の質の向上をめざすことと収益を伸ばすことを一体化して進めてきた結果です。また、介護事業所を含む吉祥院エリア内の事業連携も更に前進しました。長年、病院の多額な赤字を診療所が補填することで利益を獲得してきましたが、2015年度は2病院がそろって経常黒字になったことは今年度の成果です。

診療所群も収益が伸びず、利益予算と乖離しましたが、乖離額の9割近くを太子道・あやべ協立・たんご協立・かみのの4事業所が占めています。多額の赤字から脱却できない太子道については、年度途中に経営改善プロジェクトを設置し、改善課題について検討しましたが、本格的な実践は2016年度へ持ち越しました。かみのは患者数・延べ数とも10%増やしていますが、収支改善につなげておらず対策が必要です。

介護事業所は、介護報酬改定引き下げ対応からスタートしました。訪問看護(訪問リハ含む)は、件数・延べ数とも106%の伸び率です。西京区に3月から訪問看護STかみのを開設しました。訪問看護STの経営改善は安定した看護体制の確保が鍵です。訪問介護は、件数でげんき、延べ数で太秦安井、げんきの減少が大きく影響しました。わかばは利用者数を伸ばしましたが、収支改善は鈍化しました。デイサービスは、わかばが収益を伸ばして約1000万改善しましたが、黒字には一步及びませんでした。あらぐさも赤字額は半分には減りましたが、収益増に成功しませんでした。新規開設したふくちやま協立(デイケア)は利

用者の獲得が難航し、年間を通じても収益目標の3分の1となり、多額(1740万円)の赤字を計上、今年度に大きな課題を残しました。複合型サービスでは、新規のきょうりつは収益

目標には未達でしたが、赤字ながら経常予算をクリアしました。れんげそうは、収益確保・費用管理とも成功せず、前年度より悪化しました。居宅支援は、共通の目標にむかって健闘

した結果が給付管理数、経営結果に現れています。咲あん上京は、開設当初の入居者確保は出遅れましたが、年度末にはほぼ予定に近い入居者の見込みとなりました。新たな事業に対応して、法人内介護事業所との連携が進みました。

6. 公益法人として、61年目の新たな挑戦

創立60周年に向けたとりくみのうち、花園大学の吉永純教授(公的扶助論専門)の全面的な協力で出版した「いのちをつなぐ・無料低額診療事業」は、京都保健会60年の歩みを更に進めるに相応しい書籍となりました。無料低額診療事業(以下、無低事業)というフィルターを

